

# 先人の足跡―特別寄稿

日本と韓国

安重根に関わった日本人

教育問題プロジェクト・チーム

榎本 眞己 陸自71

教育問題プロジェクト・チームは「先人の足跡」と題し、旧軍人の足跡で現代の青少年に読み聞かせるに相応しい自己陶冶に資す先人の事績を委員が逐次交代し執筆しています。

そのような中で、日本と韓国との間ではいろいろと問題が生じています。

そこで今般は、隣国韓国との付き合い方を考える上で参考となる伊藤博文を暗殺した安重根に関わった先人の足跡と、道徳律形成に大きな影響を与える国民性が、日本と韓国とで異なることを「特別」としてお送りします。

## 1 はじめに

今から約30年前のことですが、私達陸上自衛隊の幹部高級課程学生は卒業旅行で韓国陸軍を公式訪問しました。その際に陸軍本部で「韓国陸軍の現状」と題したブリーフィングを受けました。

説明役は韓国陸軍中佐です。彼は、やおら地図に向かって「韓国の脅威は」と言いながら、太く赤字で描かれた接近経路を示しました。その一番最初の

説明が日本からの接近経路でした。同じ自由主義陣営の友軍と思いついていながらもかわらず、当てつけのような、これ見よがしの説明に唖然としました。しかも同席していた数人の韓国の将官は一樣に私どもの反応を見て皮肉っぽい笑みを浮かべていました。「日本なら訪問を受けた他国の人にこんな不躰な説明はしないのだがなあ」と思い、「韓国との付き合いは難しい」と思ったことがあります。

その思いが最近一層募ります。特に文在寅政権となつてから不可逆的とされた日韓協定である「慰安婦問題」が再燃しました。また最近では10月中旬に国際観艦式典での自衛艦の旭日旗掲揚問題が起きました。さらに同月末には日本で強制労働させられたとする所謂元徴用工に対する日本企業の賠償を韓国最高裁が決定しました。

日本に最も近い隣国の韓国との付き合いは、どのようにすれば良いのでしょうか？

そこで明治期に伊藤博文公を殺害した安重根に関わった日本人の対応を振り返り、そこから日本人と韓国人との考え方の違いを捉えた後、韓国との今後付き合い方を考えてみたいと思えます。

## 2 伊藤博文

伊藤博文は元長州藩士であり、吉田松陰に学び討幕運動に参加しました。維新後は初代、第5代、第7代、第10代の内閣総理大臣、初代枢密院議長、初代貴族院議長を歴任した人物です。

日露戦争「1904年（明治37年）2月～1905年9月」に勝利した日本は、ロシアに対してポーツマス条約により「日本国が韓国における政治上・軍事上及び経済上の優先権」を認めさせます。これにもとづき1905年11月、日本は第2次日韓協約を結んで大韓帝国の外交権を掌握し、漢城（現在のソウル）に韓国統監府（朝鮮半島を治めるために置いた統治機関）を設置し、初代統監として伊藤博文を登用します。

このような内閣総理大臣を四度も務めた伊藤を登用したのは、韓国をロシアに対抗しうる国に近代化させたいとする日本側の事情がありました。その伊藤が1909年（明治42年）10月に日露戦争後の満洲や朝鮮に対する日本の方針をロシア政府に説明するため、ハルビンに赴きます。

協議終了後の26日、ハルビン駅（ロシア権益である東清鉄道の駅）に到着した際、群衆に紛れた韓国の安重根にピストルで射殺されます。安重根は直ぐにロシア官憲に逮捕され、じご日本の関東都督府に引き渡されます。

国際連盟次長も務めた教育者の新渡戸稲造が、自分の出合った維新を成し遂げた人物のエピソードを書いた『偉人群像』に伊藤博文も出てきます。それには次のように書かれています（原文のまま）。

「当時伊藤公は朝鮮の統監であり、木内君（農商務省商工局長の木内重四郎のこと）は農相の事務担当をしてをつた。伊藤公は世間でも知る通り朝鮮は朝鮮人のため」といふ主義で、内地人の朝鮮に入り込むことを喜ばれなかつた。その反対に木内君は日本人をもつと移したい考へであつた。ゆゑにしばしば公に日本人移住の策を献策しても採用にならなかつた。ところが内地においては桂さんが、しきりに内地人移住を企て、東拓会社を設計されてをり、かつこの議には、我輩も少しく参加した関係もあるため、木内君がしきりに渡鮮を促したので、我輩は出かけて行つた。木内君の注意に「伊藤さんといふ人は、なかなか人のいふことを聞かぬ人で、僕が幾度この問題について献策したか知れんが、いつも頭を振らるゝので、少し君の力を借りたい、明日にも統監を訪問してくれ玉へ、その時は君一人で行く方がよからう」そして翌朝10時頃、統監宅を訪問した際の会話で「公の朝鮮人観」と題し、新渡戸の「朝鮮人だけでこの国を開く

ことが、果して出来ませうか」との問いに、次のように答えたのです。

「君朝鮮人はえらいよ、この国の歴史を見て、その進歩したことは日本より遙以上であつた時代もある。この民族にしてこれしきの国を自ら経営出来な理由はない。才能においては決してお互に劣ることはないのだ。然るに今日の有様になつたのは、人民が悪いのぢやなくて、政治が悪かつたのだ。國さへ治まれば、人民は量に於ても質に於ても不足はない」と幾分か語氣の強い言い方で滔々とやられた」

このように伊藤公自身は朝鮮人に対して敬意を抱いており「植民地化すべし」との動きからの防波堤となつていました。しかしその思いにも関わらず朝鮮の統治はうまくいきません。それは「文明の下流」と思つていた日本に自國が植民地化されるのではと韓国知識層が反発したこと。また優柔不斷な國王と両班に代表される墮落しきつた官僚の多くが搾取や不正ができなくなるといふ私利私欲のため、さらには日本の改革がやや柔軟性を欠き強引であつたため韓國人が改革に抵抗したためです。このような折りに、安重根は日本による朝鮮統治の象徴たる伊藤博文の暗殺を行つたのです。

しかしその結果、皮肉にも防波堤が

なくなり、翌年には日韓併合となつてしまいました。

### 3 旅順監獄所長・栗原貞吉

安重根（当時30歳）は日本の関東都督府（旅順に設置された関東州統治機関）から移送され、旅順監獄に投獄されます。そして旅順の関東都督府地方院で明治42年（1909年）11月13日に予審を受け、11月16日に結審。引き続き関東府地方院で公判が行われ、翌年2月14日の第6回目の公判で「死刑」を宣告されます。そして3月26日に処刑されました。

安重根が投獄されている旅順監獄の典獄（刑務所長）は、2年前からその職にあつた栗原貞吉でした。栗原は安に接し、その人柄と信念に感心し、煙草などの差し入れを行います。それだけでなく平石高等法院長や真鍋裁判長に会つて助命嘆願までしました。

それは安重根の動機が「日清・日露の両戦争は、宣戦の詔勅にもあるとおり、韓国の独立をはかり東洋平和を維持するために戦つたものである。にもかかわらず韓国を植民地化しようとする伊藤博文は韓国の独立を奪うものである。それは戦いで命を落とした日本人をも裏切るものである。このため私は日本及び韓国の同胞のため、かつ日本天皇陛下及び韓国皇帝陛下に忠義を

尽くさんがために、今回の挙に出た」と述べています。このような彼の意見を聴き、自分の祖国の運命を憂い民族の独立と名譽を守るため、一身を投げうつた人物として畏敬の念を持つたからです。

安重根は、裁判において死刑の宣告を受けることを覚悟していました。そこで自分のなした行為を獄中記として『安心七歴史』を3月15日に書き終えます。彼は続いて自分の信念ともいえる『東洋平和論』を書き始めます。

栗原は何とか彼が書いている『東洋平和論』を完成させてやろうと思ひ、警保局に対し「死刑執行を15日間延期されたい」との嘆願書を提出します。しかしこの嘆願は受け入れられませんでしたが。このため『東洋平和論』は序文だけで終わりました。

安重根を救えなかつたことで、自分の力不足と役人の限界を痛感した栗原は、1913年（大正2年）に職を辞して故郷の広島に帰り、医学関係の仕事に就いて、再び役人の世界に関わることはありませんでした。

### 4 看守・千葉十七

旅順監獄で安重根の監視を命ぜられた看守は、関東都督府陸軍憲兵上等兵の千葉十七（当時25歳）で、東北人特有の実直な正義感に富んだ人物でし

た。千葉は当初伊藤博文を暗殺した安を憎んでいました。しかし刑務所での安は規律によく従ひ、どんな指示にも礼儀正しく応対する素直な態度でした。しかも檢察の尋問や裁判を通じてわかる韓国の悲惨な現状、あるいは切々と訴える安の祖国愛が否心なしに千葉の胸を打つようになります。このようなことから千葉は安と話を重ねるうち、「安の人となり」に共感するようになります。

一方、安重根も千葉の知遇に応え、処刑直前に千葉に向かつて「先日あなたから頼まれた一筆を書きましよう」と告げ、「為國献身軍人本分」（國のため身を獻げるは軍人の本分なり）と書いて署名し、左手の手形を墨で刻印しました。

そして彼は、「親切にしていたたたことを心から感謝します。東洋に平和が訪れ、韓日の友好がよみがえつたとき、生まれ変わつてまたお会いしたいものです」と言い残して刑場に消えます。

朝鮮総督府での勤務を終え、千葉は故郷仙台で鉄道員として勤めながら、安重根の写真と遺墨を仏壇に祀り、亡くなるまで一日も欠かさず日々冥福を祈るとともに、日韓両国の親善と平和が訪れる事を祈り続けます。そして1934年（昭和9年）に50歳で亡く

なりませんが、その遺志は未亡人と姪の三浦くに子（実子が居なかったため）さんに受け継がれます。

### 5 三浦くに子と山本壮二郎

やがて未亡人も亡くなり、一人になつたくに子さんは、この遺墨を自分が所有しているよりも韓国に有る方がよいと考えます。そこで昭和54年（1979年）、韓国で安重根義士生誕100周年記念式典が催されると聞き、東京韓国研究院を通して、首都ソウルにある安重根義士崇慕館に寄贈します。安重根は韓国では「義士」と称され、国民的英雄とされています。このためこの遺墨は現在、韓国の国宝となつていきます。

また、千葉十七の墓のある宮城県栗原市の大林寺では、遺墨の譲渡を機として寄金を募り、2年後の昭和56年（1981年）の安重根の命日に「安重根と千葉十七の記念碑」を建立します。

この記念碑の表は、安重根の遺墨を鮮やかに蘇らせ、裏には「安重根義士と千葉十七の顕彰碑文」が書かれています。これを揮毫したのは、当時宮城県知事であった山本壮一郎氏です。その碑文の最後には「安義士の命日に際し日韓両国永遠の友好を祈念して」と書かれています。そして現在も大林寺

では毎秋「祖国を思う心」で結ばれた2人の追悼と日韓両国永遠の友好供養が続けられています。

### 6 日本人と韓国人

日本人は、例え安重根がテロリストの罪人であっても、それはお互いの国の立場が異なるからであり、人としての価値は異なると考えます。だからこそ監獄所長であった栗原貞吉も看守であつた千葉十七も日本の立場だけでなく、もつと大きな心で安重根を思い遣りました。現在韓国で国宝指定となつている遺墨は千葉が安重根に書いてもらつたものであり、遺族が70年間も保管したものであり、韓国に返還する謂われはありません。しかし千葉の遺族は一看守の遺族が持つているよりも、

韓国の記念館で所蔵する方が良く考えたのです。また山本壮一郎も国を超えた千葉と安重根との心根に感動し記念碑に揮毫しました。そして大林寺は今も毎年亡き2人の法要と日韓両国の友好を追悼供養しています。そこには「怨恨」という人間の嫌な面はありません。韓国人であろうと日本人であろうと、同じ人間として気高い者が尊敬されると考えます。しかも遺墨にまで人間と同様の意志ある者として、その落ち着き先を思いやるのです。韓国人にも個人的にはこのような考

えを持つ方が多くおられるはずですが、しかしこと「日本」相手となると個人でもそうでなくなります。

韓国には「恨（ハン）」と言われる朝鮮文化の思考様式があります。「恨」とは達成したいけれども達成できない、自分の内部に生まれるある種の「くやしさ」を表しているそうです。この「恨」が大閔秀吉の朝鮮出兵以来の「反日」と絡まって様々な問題となります。特に大きな問題は韓国の建国の歴史です。

現在の韓国人は1910年（明治43年）の日韓併合を認めていません。それは「侵略」と捉え、この「侵略」以降、韓国人は「抗日戦争」を続けていたとしています。そして1919年（大正8年）の独立を求める集会であつた「三一運動」が阻止されたことに伴い、上海に逃れた人々が国際社会からは認められていませんが、「大韓民国臨時政府」を樹立したとしています。

その活動もあり「日帝36年」の支配を倒して1945年（昭和20年）に独立を勝ちとつたとしています。こういうことですから、1945年8月15日に韓国を建国した際の現在の憲法の前文にも「我々大韓国民は三一運動で成立した大韓民国臨時政府の法統と」の記述があるのです。またこの考えに基づき韓国は日本と戦争をしていない

にも関わらず、サンフランシスコ講和条約へ戦勝国としての地位を求めて連合国に打診しましたが、一蹴されました。

しかし、その後も一貫して日本との戦争に勝利したという証を求めて外交活動をしているのです。しかもこの建国の歴史は教科書に書かれていて、現在も韓国の子供たちに教えられています。これが「日本への『恨』」であり、国際社会が認定するまで続けようとしています。

このように両国民は同じような風貌をしているのですが、その国民性には大きな違いがあります。その違いを自分の考えで相手が間違っているとか、悪いと言つても意味のないことです。要は、日本の車両が左側通行であり、韓国の車両は右側通行というようなものであり、善悪の問題ではないと考えるべきです。

### 7 おわりに

日本と韓国との間には数えきれないほどの諸種の問題があります。挙げてみれば、竹島問題、排他的経済水域と大陸棚延伸に関わる問題、日本海呼称問題、歴史教科書問題、朝鮮半島から流出した文化財の譲渡要求、靖国神社問題、慰安婦問題、対馬島返還要求問題、仏像盗難事件、知的財産権侵害問

題、徴用工問題、旭日旗問題、アルファベット表記問題、集団的自衛権問題、半島有事の際の在韓日本人救出問題等々です。

これらは統治時代に半島に残した日本の財産返還放棄、さらに韓国に対し当時の韓国年間予算の2倍強にあたる約8億ドルの経済協力により、両国間の請求権の完全かつ最終的な解決という1965年(昭和40年)の「日韓基本条約」と「協定」で解決したと日本は思っていました。そして日韓関係は未来志向になると思ったのです。しかしそうではありませんでした。

それでもなお韓国と日本とは一衣帯水の関係にあり、日韓両国はお互いに貿易相手国第3位であり経済的な結びつきも大です。しかも本来は北朝鮮や中国の共産主義国に対し、同じ自由主義国家とし安全保障上は同床(現時点では北朝鮮及び中国と親密な関係を結ぼうとしている)のはずです。

相手の立場を尊重する日本人は、日本に併合された朝鮮の方々に天皇陛下のもとより歴代首相もその都度謝罪をしてきました。しかし呉善花氏は次のように言います。「日本の政治家は何度も謝っているが、いまなお韓国人が謝罪を要求するのは、その謝り方が韓国式でないから。韓国式なら、土下座をして、手をすり合わせながら涙を流

し、繰り返し「悪かった」といったうえで、日本の領土を3分の1ほど差し出すことなのだ」と。

これらを考えると、日本と韓国とが協議し、お互いが理解し合うというのは、幻想に過ぎないように思われます。出口のない隘路に入ったような現在の日韓関係を修復するため、韓国に謝罪すること、あるいは議論により改善しようとしても無駄です。韓国にも「日本への『恨』」に囚われない人はいます。そのような人との個人的な付き合いは別として、国家としての振る舞いにおいては、少々距離をおくのが賢明のようです。

それより寧ろ、私ども自身が他国の人々から信頼を寄せられる存在となることです。そうすることにより韓国の人が自分たちの考えが間違っているのではと気づくのを待つ方が良いと思われれます。

(平成30年11月末 記)

#### 【参考文献】

- ・『維新群像』 新戸部稲造 実業之日本社
- ・『安重根』 斎藤泰彦 五月書房
- ・『韓国の危機』 小室直樹 カップブックス
- ・『朝鮮紀行』 イザベラ・バード 講談社学術文庫
- ・『RONNA』日韓和解は幻想だ「強すぎる日本」を構築せよ 武貞秀士